令和6年度　看護医療交流センタープロジェクト一覧

プロジェクトNo.	申請者	プロジェクト名	活動メンバー	備考
1	工藤　安史	東海3県の病院におけるズームを用いた統計学セミナー	工藤安史、杉崎一美、高崎昭彦、豊田妙子、加藤玲子	
2	増田　由美	施設で過ごす子ども訪問「ひまわりの会」活動支援	増田由美、春名誠美、北井真紀子、中村いお美、馬場佳理	
3	杉崎　一美	三重県内の看護職に対する質的研究分析の支援プロジェクト	杉崎一美、後藤由紀、増田由美、藤井夕香、春名誠美、北井真紀子、佐藤優子	辞退
4	大谷 喜美江	地域で保健師就職を希望する本学在学生へのサポート事業	大谷喜美江、後藤由紀、多次淳一郎、佐藤優子、小林左耶花	
5	多次　淳一郎	大学から地域に届ける「絵本の世界」	多次淳一郎、春名誠美、鈴木真紀子、北井真紀子、馬場佳理、小林左耶花	
6	久留島　実姫	「できる」看護師になるための処方箋	久留島実姫、小寺直美、林香純、中村いお美	
7	佐藤　優子	地域で働く看護職（本学卒業生）へのサポート事業	佐藤優子、後藤由紀、大谷喜美江、多次淳一郎、春名誠美、北井真紀子、小林左耶花	
8	吉田　和枝	クリティカルケア看護CNS学習会	吉田和枝、豊田妙子	
9	鈴木　真紀子	『臨床検査技師』を子供たちのあこがれの職業に！ ～将来なりたい職業ランクイン大作戦～	鈴木真紀子、山口鎮、渡辺正生、森明日香、榎本喜彦、大島茂、加藤泰宏、伊藤健太、高崎昭彦、金田泰代	
10	後藤 由紀	地域の高齢者健康支援プロジェクト～地域診断による健康課題の発見	後藤由紀、大谷喜美江、佐藤優子、小林左耶花	
11	春名　誠美	地域住民の健康づくりプロジェクト	春名誠美、吉川尚美、 Daniel Kirk、日比千恵	
12	吉川　尚美	応急手当ができるバイスタンダーになろう	吉川尚美、春名誠美、野内香純、小寺直美、渡辺正生	
13	榎本　喜彦	四日市看護医療大学スピリットの継承	榎本喜彦、千原猛、森本誠、伊藤健太、渡辺正生、高崎昭彦	
14	榎本　喜彦	地域住民の健康増進に寄与する	榎本喜彦、千原猛、森啓至、森本誠、大島茂、加藤泰宏、金田泰代、伊藤健太、後藤由紀、大谷喜美江、佐藤優子、小寺直美、吉川尚美、山口鎮、渡辺正生、水谷有、高崎昭彦	
15	榎本　喜彦	エイズ予防啓発活動－感染検査普及を目指して	榎本喜彦、千原猛、後藤由紀、大谷喜美江、佐藤優子、渡辺正生、高崎昭彦	
16	岡村　勇飛	大学で“つながる”プロジェクト	岡村勇飛、伊藤康広、小菅優子、多次淳一郎、日比千恵、榎本喜彦、小寺直美、鈴木真紀子、春名誠美、北井真紀子、渡辺正生	
17	古田　知香	心を豊かにする臨看シネマ	古田知香、北井真紀子、永住沙樹、岡村勇飛、藤井夕香	
18	古田　知香	高齢者施設における交流プロジェクト	古田知香、三好陽子、藤井夕香、岡村勇飛	
19	小寺　直美	災害教育プロジェクト	小寺直美、工藤安史、久留島実姫、小菅優子、多次淳一郎、鈴木真紀子、野内香純、春名誠美、吉川尚美	

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護研究交流センター長　様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：東海３県の病院におけるズームを用いた統計学セミナー
責任者名：　工藤安史
メンバー名：杉崎一美　高崎昭彦　豊田妙子　加藤玲子
活動内容および成果： １　プロジェクトの活動目的および目標 東海 3 県の病院を対象に統計学セミナーを行うことで、医療従事者のデータ処理能力の向上に寄与することである。 ２　活動計画（P） 東海 3 県の病院に案内状を郵送し、セミナーを開催した。主な対象は、看護師と臨床検査技師である。 ３　活動の実際と結果（D） 11 月 30 日(土)の 13:00 から 15:40 にズームを活用してセミナーを実施した。今年度の統計学セミナーは、「交絡因子の調整―重回帰分析とロジスティック解析―」というテーマで実施した。セミナーを実施するにあたり、重回帰分析とロジスティック解析を用いてどのように交絡因子を調整するのか、などについて独自にレジメを作成し、セミナーを行った。また、レジメには、練習問題も組みこんでおり、受講生はこの問題にトライすることで、知識が定着できるように工夫した。さらに、事務局の加藤様から、事前にこのレジメを受講者全員にメール送信することで、受講者が予習できるようにした。今年度の参加者は、190 名であった。 ４　活動の評価（C） 医療従事者の統計学の知識を増やすことに貢献できたと考えている。 ５　今後に向けての活動方針（A） 来年度も、今年度と同様な方法で統計セミナーを実施し、地域貢献をしたいと考えている。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：施設で過ごす子ども訪問「ひまわりの会」活動支援
責任者名： 増田由美
メンバー名：春名誠美、北井真紀子、中村いお美、馬場佳理
１　プロジェクトの活動目的および目標 地域の乳児院で暮らす乳幼児を訪問する学生が、安心・安全に日常生活援助や遊びの支援を通して子どもたちとふれあえ、施設で暮らす乳幼児への理解を深めることができる支援を行う。また、施設で働く看護職の実際を知る機会につなげる。 ２　活動計画（P） ① 施設との調整：訪問予定日時、人数、内容、感染・事故予防に向けた取り決め、等について担当者と話し合いをもつ。 ② 活動同行：毎回１～２名のメンバー教員が同行し、学生と活動を共にしながら実践における安全・安心を確保すると共に、勤務する看護職の実際を見学する。 ③ 活動振り返り：活動終了時に参加者と施設職員とで振り返りの機会をもつ。 ３　活動の実際と結果（D） 5/18、6/1、7/13、10/5、11/16、12/7 の計 6 回、のべ 31 名（4 年生 10 名、3 年生 21 名）の参加を得た。同伴した教員はのべ 7 名。0 歳児から 4 歳児までの子どもが暮らす 3 ユニットに分かれて日課に沿い 10 時～13 時を目途にあそびや散歩、排泄・清潔の世話、午睡への誘導などを体験した。活動による感染や事故は相互に認められなかった。活動日に看護師が常に勤務しているとは限らず、合致した日に医務室訪問ややりがい、この仕事を選んだ理由などを学生から質問する機会が得られた。 ４　活動の評価（C） 参加希望者が昨年度 27 名から今年度 31 名と 2 年連続して増えたため、回数の追加を施設に交渉することで希望者全員の参加を可能とした。3、４年生は小児の発達に関する学習がなされ、領域実習もあり、小児への関心が高い学生が集まった傾向は昨年

と同様であった。また、今年度初めて看護師の仕事内容に触れ、視野を広げることにつながったと考える。学生は子どもに慕われ、笑顔満面で活動しながら、全身で子どものエネルギーに応えており、満足のいく環境が提供できたと考える。なお、これまでの活動内容をまとめ、今年度の紀要に投稿した。

５　今後に向けての活動方針（A）

活動も３年目に入り、順調に参加希望学生数が伸びている。少しでも多くの学生が安全・安心な環境のもと、施設で暮らす子どもと看護師の働く現場の理解を深められる環境を今後も整えていきたい。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：地域で保健師就職を希望する本学在学生へのサポート事業
責任者名：大谷喜美江
メンバー名：後藤由紀、多次淳一郎、佐藤優子、小林左耶花
１　プロジェクトの活動目的および目標 保健師就職に関心のある在校生が、進路や将来展望を考える契機とすることを活動目的とした。活動目標は、１）保健師課程の学生への就職情報・相談機会の提供、２）保健師就職内定者からの経験談を含む情報交換会の開催とした。 ２　活動計画（P） １）３・４年生保健師課程履修者へのメールによる採用募集案内の提供・個別相談 ２）3年生保健師課程および1・2年の希望者を対象とした情報交換会の開催 ３　活動の実際と結果（D） １）行政・産業・健診センター等の保健師募集案内のURLリンク先などをメールに添付し、保健師課程3・4年に周知した（通年）。また学生の求めに応じ、進路を検討中の3年生への相談対応や採用試験応募予定者への履歴書添削・面接練習を実施した。 ２）2025年3月17日（月）14:00～16:00に対面で実施。在校生20名（1年8名、2年9名、3年3名）の参加を得た。 ４　活動の評価（C） １）事前計画のとおり、メール案内、相談対応を実施できた。案内をみて、応募につながった例がみられた。 ２）事前計画のとおり開催できた。1・2年生が多く、保健師職種への関心を深める機会にもつながった。3年生からは、勉強を頑張ろうと思えたとの感想が得られた。 ５　今後に向けての活動方針（A） 在校生にとり、採用試験情報の入手や身近な先輩からの体験談を聞く機会は大変貴重だと考える。学習意欲の向上にもつながるため、今後も継続していく。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：大学から地域に届ける「絵本の世界」

責任者：多次淳一郎

メンバー：多次淳一郎、春名誠美、鈴木真紀子、北井真紀子、馬場佳理、小林左耶花

1　プロジェクトの活動目的および目標

＜活動目的＞本学学生が地域の子育てサロン等で読み聞かせを行い、主体的な社会貢献活動を支援する。また、学生主導のサークルへの発展を目指す。

＜活動目標＞　①学生が教員のサポートを受け、自律的に絵本の読み聞かせを実施できる。

②学生間の話し合いを通じて自主的なグループ運営を支え、学友会にサークルとして登録できる。

2　活動計画（P）

1）学生の募集

新入生オリエンテーションなどの機会を通して新たなメンバーを募った。

2）サークル化に向けた取り組み

次年度以降の組織化にむけた学生の機運が醸成されるよう働きかけを行う。

3）読み聞かせの企画・練習・実施

2023年度と同数程度の団体、回数実施する。

可能な団体は、学生が自律的に日程調整を行う。。

3　活動の実際と結果（D）

1）学生の募集

新たに15名が加わった。

２）サークル化に向けた取り組み

LINE グループの運用を通じて、学生と教員が対等な立場で情報を共有した。また、実施後の様子の報告を学生に行ってもらうように働きかけた。

３）読み聞かせの実施

６施設で 10 回、実施した。各回２～６名の学生が参加した。

４　活動の評価（C）

概ね計画通り実施できた。実施場所は前年度からの継続であり、各団体等との関係性も深めることができた。一方で、サークル化を念頭に学生への働きかけも試みたが、現状では教員主体の連絡調整が必要な団体等が多く、次年度以降の継続課題である。

５　今後に向けての活動方針（A）

３年目の活動となった今年度も、学生教育、社会貢献の面から意義のある活動であることを改めて再確認することができた。今後、学生の自主的な活動へ転換を促すことを視野に入れ次年度もプロジェクトは継続していく。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：「できる」看護師になるための処方箋

責任者名：　久留島実姫

メンバー名：小寺直美　中村いお美　林香純

１　プロジェクトの活動目的および目標

活動目的：看護師に求められている臨床推論のための思考力を養う

活動目標：　メンタルシミュレーショによって患者の急変リスクを判断できる

２　活動計画（P）

対象：本学看護学科４年生　10～20名程度の希望者

実施時期：令和６年５月～10月に1～2回/月程度（予定）

方法：「できる」看護師の認知機能をモデル化したGOLDメソッドの看護実践スクリプト（エキスパートが医療を実践する認知の系列）と認知エイド（知識カード）を用いたシミュレーション学習を行う。

３　活動の実際と結果（D）

1）参加者：2名

2）活動の実際

（1）回数：6回（7/4、7/23、8/2、8/22、9/12、3/14）

（2）内容：GOLDメソッドの看護実践スクリプトに沿って、メンタルシミュレーションによる、患者の急変リスクの判断を行った。

3）結果：参加者の感想

・パッと見判断がとても大事であることが分かった。患者のところに行く前に、リハーサルをして実際に患者をみると少しの異変にも気づきやすく、素早い対処ができると思う。

・就職後に実際に患者に対応していくときに使えそう。

・よりリアルに患者さんのことについて考えることができた。

・いつもと違っておかしいなと感じた際には、何がいつもと違うのか、それは異常なのか正常なのかをしっかりとした根拠を持って考えられるようになった。

4　活動の評価（C）

申請時の計画では、10～20名の参加者を予定していたが、実際は2名のみであった。学生のスケジュール上、説明会の日程がなかなか取れず、当日も他の予定との重複があり参加者が少なかった。そのため、本プロジェクトの目指すところを十分に伝えることができなかったと考える。また、就職試験、看護研究、国家試験という4年次の課題が優先され、時間的・精神的にプロジェクトに参加する余裕がなかったことも参加者が少なかった原因であると考える。

6月にアナウンスと説明会を行い、日程調整の後、7月から開始し、計6回開催できた。

参加者の感想から、彼らは患者観察テクニックの視点を理解し、就職後の活用も期待できると感じていた。従って、本プロジェクトの目的である4年生の就職後の不安の軽減を期待し、急変に繋がるような患者の小さな変化を見逃さない観察力と、観察した情報から臨床推論を用いて適切な判断をするために必要な思考力を養うことに貢献できたと考える。

5　今後に向けての活動方針（A）

2名の参加者には、就職後の実際の活用状況を報告してもらい、GOLDメソッドの効果を検討し、教育実践に活用したい。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長　様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：地域で働く看護職サポート事業

責任者名：佐藤優子

メンバー名：後藤由紀・大谷喜美江・多次淳一郎・春名誠美・北井真紀子・小林左耶花

１　プロジェクトの活動目的および目標

本学を卒業し、地域で働く看護職（保健師・在宅看護）を目指す者へキャリア情報を提供することと、地域で働く看護職を目指す者同士がつながり、相互にキャリア形成に向けての情報交換を行う場を提供していくことを目的とし、地域で働く看護職を目指す卒業生が一人でも多く、その目的を達成できること（地域で働く看護職として就業できること）を目標としている。

２　活動計画（P）

① 地域で働く看護職を目指す卒業生をグループLINEに招待し、LINE上で就職情報や地域で働く看護職関連の研修情報だけでなく、それぞれの困りごとの相談や有益な情報等、登録した者が自由に情報発信する場とする。また、相互に情報発信・共有することで、より多くの情報に触れ、選択の幅を広げていけることを支援する。

② 年1回、地域で活動する卒業生（保健師、在宅看護職）からの活動報告をハイブリッドで行い、参加者相互に交流を深めることで、プライベートでも情報交換が促進できるよう支援を行う。

３　活動の実際と結果（D）

① グループLINEには、現在156名の登録があり、R6年4月～R7年3月13日までの間に、行政機関・事業所・健診センター・社会福祉協議会等にて合計66件の就職情報と講演会および研修会情報6件、就職についての相談と情報提供2件があった。

② 実際の意見交換会は、来所での参加者8名・オンライン参加者2名の計10名（欠席者3名）での開催となった。当日は本学を卒業し、行政保健師として就業している者と在宅看護職として就業している者が1名ずつ、仕事とプライベートを織り交ぜながら講和を行い、その後参加者相互に自由に語り合う時間の中で、仕事への思いや就職活動について情報交換等を行った。

4　活動の評価（C）

グループLINEについては、昨年度と比べてより多くの就職情報を提供できていた。可能であれば、情報提供から実際の就業につながったか否かがわかるとなお良いのではないかと思うが、プライバシーの問題も有り、LINE 上では難しいと考えられる。

卒業生の会参加者数は例年通りであったが、参加者数を増やすためには公表時期を考慮し、計画の立案と開催についての情報開示時期の検討や、グループライン上の情報提示は、新規の情報で次々流れて行ってしまい、さかのぼって見ることが難しいことがかんがえられるため、提示回数を増やす等の工夫が必要であると考える。

本会についての感想は良好であり、実際に新しい働き方の情報交換も積極的にできている様子から、今後も継続していきたいと考える。

5　今後に向けての活動方針（A）

地域で働く看護職を目指しながらも臨床現場に就業した卒業生は、日々の業務に追われるなどして、情報を集めることは難しい。そのため、就職情報が集まる大学側からの情報発信は理にかなっており、地域で働く看護職についての情報提供は今後も積極的に続けていく必要があると考える。また、登録した卒業生同士が直接情報交換する場も、似た世代が交流を深め、普段は語れない悩みなどを相談、共有することができる場であることや、普段は交流が無い先輩方から直接自身のキャリア形成についての助言を得らえる場となることなど、卒業生のキャリア支援において有効な場であると考える。そのため、今後はより多くの卒業生が参加しやすい日程や情報提示について検討し、効果的な実施を目指していきたい。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：クリティカルケア看護 CNS 学習会

責任者名：　吉田和枝

メンバー名：豊田妙子

１　プロジェクトの活動目的および目標

クリティカルケア CNS として、自施設においてもリーダーシップを発揮していくために研究をする力をつけることを目的とする。

２　活動計画（P）

以下の順に沿って活動を進めていく。

①研究テーマの抽出、②文献レビュー、③研究デザインの検討、④計画書の作成、⑤倫理委員会の承認、⑥調査の実施、⑦データの分析、⑧論文の作成

３　活動の実際と結果（D）

参加者：宮原、辻内、内山の３名の CNS 修了生及び豊田、吉田

令和６年 12 月７日　①研究テーマの抽出

令和７年１月 13 日　②文献レビュー

令和７年２月９日（Zoom）　③研究デザインの検討

令和７年３月 23 日　④計画書の作成

４　活動の評価（C）

各施設の倫理審査に提出できるまでに研究計画書が作成できた。

５　今後に向けての活動方針（A）

各施設の倫理審査の結果をうけて、研究に着手していき、得られたデータを分析し、さらには学会で発表、論文化を進めて行くために継続的に行っていく必要があると考える。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：『臨床検査技師』を子供たちのあこがれの職業に！
～将来なりたい職業ランクイン大作戦～

責任者名：鈴木　真紀子

メンバー名：鈴木真紀子、山口鎮、渡辺正生、森明日香、榎本喜彦、大島茂、加藤泰宏、伊藤健太、高崎昭彦、金田泰代

１　プロジェクトの活動目的および目標

臨床検査技師の仕事は現代医療に欠かせない役割を担っているにもかかわらず、臨床検査技師の知名度は低い。魅力ある臨床検査技師の仕事を、進路をおおよそ決定する高校生よりも前の段階で知り、小学生、中学生の将来像の１つとして考えてもらうことを目的とする。具体的には、臨床検査技師の仕事に関するオープンスクールを大学で実施し、臨床検査技師の仕事を楽しく体験しながら知ってもらう。文部科学省の調査結果より理科離れの実態が浮き彫りとなっている小中学生の現状を打破する一助にしたい。また、将来なりたい職業ランキング（日本 FP 協会）では、臨床検査技師は、小学生男子ランク外、女子 116 位である。小学生や中学生の憧れの職業上位ランクインを目指す。

２　活動計画（P）

「臨床検査技師」を子供たちの憧れの職業とするため、知名度を上げる目的で、小学生および、中学生を対象のオープンスクール開催を計画した。　2022 年度採択されたプロジェクトの継続として実施。3 年間で軌道に乗せる計画で展開することとし、年度単位で計画の見直しを行う。

① 2024 年度；小学生向けオープンスクールの開催（夏休み開催）

2022、2023 年度の活動の見直しをして実施

2023 年度と同様、1 日開催で、午前の部、午後の部の 2 部制で実施する。

※開催日を増やす方法で検討する。

② 2024 年度；中学生向けオープンスクールの開催（春休み開催、夏休みも検討）

2022、2023年度の活動の見直しをして実施

2023年度と同様、1日開催で、午前の部、午後の部の2部制で実施する。

3　活動の実際と結果（D）

① 小学生向けオープンスクール　2024年8月5日開催（資料1）

内容；医動物学実習「アニサキスを探してみよう！」

超音波検査体験「超音波検査の体験をしてみよう」

採血体験「採血を体験してみよう！」　【参加人数10名】

※運営；プロジェクトメンバー、学生スタッフ12名

② 中学生向けオープンスクール　未開催

4　活動の評価（C）

① 小学生向けオープンスクールについて、午前の部、午後の部の2部制で実施することを計画していたが、学生や教員の負担が大きいことから、午前のみの開催とした。募集人数には早い段階で達したため、参加者は集まると考えられる。「しっかりと教えてくれた。」「先生や学生さんが優しかった。」という声が多く寄せられ、マンツーマンでの指導は継続すべきだと考えている。

参加者の内、1名のみが臨床検査技師を知っており、ほとんどの参加者が臨床検査技師を知らなかったため、今回のオープンスクールで、臨床検査技師の知名度を上げるという目的は達成できたと考える。

また、全参加者がオープンスクールを楽しかった、とても楽しかったと感想を伝えてくれており、参加者の満足度が高かったことで、本学や臨床検査技師に対する好感度を上げることができたと考える。

さらに、参加者の内2名が、本学に対して興味を持ってくれた感想を書いてくれた。「進路に迷ったらここに来ようか検討しようと思った。」「この大学に入学したいと思った。とても勉強になった。楽しかった。」と、本学へ興味を持ってくれることに繋がり、予想以上の成果があった。

② 中学生のオープンスクールを計画していたが、中学生の夏休み期間に実施をしたかったが、9月に暁高校のオープンキャンパスがあり、本学に中学生が来るという予定があることから、なる休みを外してほしいという提案があった。昨

年もそのため春休みに実施したが、春休みは中学生が忙しいことから断念に至った。本学に中学生が来ることと、本プロジェクトは別物のため、中学生の事情からも夏休みで開催をしたかった。プロジェクトメンバー内での意見が割れ、まとめることが出来なかった。

5　今後に向けての活動方針（A）

＜本プロジェクトの活動と検証結果を踏まえ、今後の活動方針（プロジェクトを継続する、教育実践に活用するなど）について記載ください＞

本プロジェクトの目的は、臨床検査技師の知名度を上げる事及び、臨床検査技師を小中学生の憧れの職業にすることである。今回開催したオープンスクールのアンケート結果より、「参加して良かったか」の問いには、アンケート回答者の100%が参加して良かったと回答している。「臨床検査技師に興味を持ちましたか。」の問いには、アンケート回答者の小学生77.7%の参加者が「興味を持った」と回答した。

昨年に引き続き実施したことから、リピーターが多かったこと、過去の参加者の妹さんが参加したことが特徴的であった。さらに、「また来るね。」「来年も来るね。」という声をかけてくれた参加者もいて、プロジェクトを継続していくことが重要であると考えた。

この結果から、継続して開催することで、臨床検査技師のみならず、本学への入学に将来的につながる可能性を見出した。小学、中学と継続開催をし、リピーターの参加者と学生、教員の関係を密にすることで、参加者の将来の選択肢の一つに検討してもらえると考える。その為に、実施内容を毎年更新しなければならず、再度検討が必要であると考える。

実施方法について、丁寧に教えるため少人数をこだわりとしているが、1名の参加者に1名の学生を付けることは必須とし、開催日数を増やすことで、新規参加者を獲得していく必要があると考える。その為には、教員、学生ボランティアの協力が必須であり、システマティックに進められるよう検討が必要である。

自由研究の
ヒントになるかも！

いろんな実験してみよう！

夏休み
オープンスクール

白衣を着て写真を撮れるよ！

8月5日（月）

10:00～12:30

小学5・6年生　対象

会場
四日市看護医療大学

付添OK！

大学生に色々教えてもらおう！

内容

- アニサキスを探してみよう！
- 採血を体験してみよう！
- 超音波検査の体験をしてみよう！

詳細は裏面をご覧ください。

お申し込みはこちらから

申込期限：2024年8月1日（木）

裏面の"お申込みにあたって"を
ご確認の上、お申込みください

Yokkaichi Nursing and Medical Care University
四日市看護医療大学

お問い合わせ
四日市看護医療大学
入試広報室
059 - 340 - 0707
nyushi@y-nm.ac.jp

臨床検査技師（りんしょうけんさぎし）って知っていますか？

皆さんは病院で検査を受けたり、健康診断を受けたことはありますか？臨床検査技師は病院や検査センターでさまざまな検査を行なっている医療現場では欠かせない存在です。小学生の皆さんやご家族の方にもっと臨床検査技師の仕事や魅力を知っていただきたい！と思い、今回のオープンスクールを企画しました。
医療の現場で活躍する臨床検査技師の仕事を四日市看護医療大学で体験してみませんか？

集合時間・場所

- 受付開始／　9：50
- 四日市看護医療大学　　B館　（④の建物）３階実習室

※お車でお越しの際は⑦の駐車場をご利用ください。

当日のスケジュール・内容の詳細

10:00 **全体説明**

10:10 **医動物学実習「アニサキスを探してみよう！」**

アニサキスは、多くの魚に住み着いている寄生虫です。特に多いとされる魚は、カツオやサバですが、本当にいるのかな？実際にサバを使って探してみましょう。
見つけたアニサキスの体内を、実際に顕微鏡で見てみましょう！人間と同じように、脳や肺はあるのかな？

11:00 **休憩**

11:10 **超音波検査体験「超音波検査の体験をしてみよう！」**

おなかの中の赤ちゃんを見るのに使われる検査で、おなかの中を外から見ることができます。ズバリ『箱の中身はなんだろな？』です。中身が見えない容器の中に何が入っているのかがわかってしまうのが超音波検査です。
今回は、おなかの模型を使って体の中にある肝臓や腎臓がどのように見えるのか体験してみましょう。

採血体験「採血を体験してみよう！」

モデルを使って採血を体験してみよう！

12:00 **記念撮影（予定）・アンケート記入**

12:30

お申込みにあたって

お申込みの際には以下の点をよくご確認・ご理解のうえお申し込みください。

1. 当日はキッズサイズの白衣をご用意しますが、染色液等で汚れる可能性がございます。念のため汚れてもいい服装でお越しください。
2. 医動物学実習では切り開いた魚を用いて寄生虫（アニサキス）を探します。寄生虫や生ものが苦手な方は参加をお見送りください。
3. 熱中症予防のため、各自水分やタオルをお持ちください。（学内の自動販売機もご利用いただけます）
4. 当日、体調が優れない方はイベントの参加をご遠慮いただきますようお願いいたします。
5. お申込み受付は定員に達し次第、終了させていただきます。あらかじめご了承ください。
6. お申込みはQRコードよりWEB申込フォームからお願いいたします。フォームの送信をもって、受付完了となります。 お申込み期限：2024年8月1日(木)
7. ご不明な点や当日の欠席連絡については、以下の四日市看護医療大学入試広報室までご連絡ください。

Yokkaichi Nursing and Medical Care University
四日市看護医療大学

お問い合わせ
四日市看護医療大学
入試広報室
059 - 340 - 0707
nyushi@y-nm.ac.jp

お申込み

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：地域の高齢者健康支援プロジェクト～地域診断による健康課題の発見
責任者名：後藤由紀
メンバー名：後藤由紀、大谷喜美江、佐藤優子、小林左耶花
１　プロジェクトの活動目的および目標 Ａ町の保健師と協働して健康診断結果等の分析および地域診断によって健康課題を明らかにする ２　活動計画（P） Ａ町保健師との会議により、ニーズを把握する。健診データや地域特性などをヒアリングして、健康課題を明らかにする。 2か月に1度程度の会議（メール会議含む）により健康課題を明らかにする。 ３　活動の実際と結果（D） 会議の結果、健康日本21（第3次）の課題の一つである骨粗しょう症の検診と支援事業について検討した。既存のデータを分析すること、また検診実施時のアンケート内容について検討を行った。若年者の自殺が全国的に増加していることより、Ａ町で実施してる心の健康（予防対策）をテーマとした実践報告を学会にて報告することとした。数回の検討により、「A町における若年層へ向けたこころの健康づくりの取組について－中学生との協働による啓発資材作成－」としてＡ町保健師が第 13 回日本公衆衛生看護学会（愛知）学術集会発表をおこなった。 ４　活動の評価（C） 健康支援プロジェクトとして、骨粗しょう症検診結果と日常生活の分析を行う必要性について、市町保健師と協働して活動できた。このことは、科学的根拠に基づいた市町の保健事業の展開、また地域職員との協働活動であり公衆衛生看護の技術を駆使した大学の地域貢献にも繋がったと評価する。また若年層への対策については、活動テーマとは異なるが、市町保健師のニーズを捉えて、学術的な側面から大学として支援できた。こ

のことも地域連携、地域支援に貢献できたと考える。このような活動は、我々公衆衛生看護学領域の教員が、地域の実情を捉えた教育を実施する基盤、すなわち教育の質の向上にもつながると考える。

５　今後に向けての活動方針（A）

骨粗しょう症検診と日常生活の関係性について、科学的視座から引き続き地域連携事業として継続する。また、市町村の保健専門職のニーズを捉えながら支援活動を実施する。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：地域住民の健康づくりプロジェクト
責任者名：春名誠美
メンバー名：吉川尚美, 日比千恵, ダニエル・カーク
１　プロジェクトの活動目的および目標 ＜活動目的および目標を明確に記載ください＞ 目的：本学と菰野町との包括連携協定にかかる協働事業の一環としてプロジェクトを発足し, 菰野町と地域社会の発展および人材育成及び学術の振興に寄与する. 目標：菰野町との協定に基づき, 地域住民の健康づくりに貢献すべく研究・活動を進めてゆく. ２　活動計画（P） 1.活動事業を達成するための会議を適宜開催する. 2.健康づくり事業に関する取り組み 1)イベントが開催された場合, これまでと同様に学生ボランティアと協力して地域住民との交流を図ると共に, 地域住民の健康づくりの推進に寄与する. また, 各イベントへの参加を通して本学の PR 活動を行う. 2）地域貢献に結び付く活動を行う. 3）地域住民の健康づくりに関する研究検討. ３　活動の実際と結果（D） 1.適宜必要時プロジェクトメンバーが集まりまたはメールで会議・打ち合わせを行った。 2.2)以下に記載する５つのイベントに、ボランティア希望した学生らと ともに参加した。 R6.5.25. 春のウォーキング大会, R6.6.23. けやきフェスタ, R6.8.18. 菰野町夏まつり, R6.10.19. 秋のウォーキング大会, R6.11.23. ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 湯の山温泉

3）地域住民の健康意識の調査研究に着手した。

4　活動の評価（C）

今年は、『春と秋のウォーキング大会』,『けやきフェスタ』,『夏祭り』,『ガストロノミーウォーキング in 湯の山温泉』に参加した。菰野町との連携活動は盛況に終えることができ、参加者からも良い反応を得た。また、学生ボランティアにおいても、活動を通じ地域社会への理解や、地域の保健・医療・福祉の担い手としての意識を高めることができた、との感想を得た。

研究活動のおいても、菰野町の健康意識調査研究を今年度末から令和8年度を予定に実施中である。本活動の地域住民への健康づくりに寄与する目的は達成できたと評価できる。

5　今後に向けての活動方針（A）

可能な範囲での包括協同連携の継続と、菰野町の開催する健康イベントへの参加協力を行い、地域住民とのコミュニケーションを図り、健康づくりに貢献する。

また、今年度より開始した菰野町の「地域住民の健康意識調査研究」の実施継続を行う。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：応急手当ができるバイスタンダーになろう

責任者名：　吉川尚美

メンバー名：春名誠美、野内香純、小寺直美、渡辺正生

１　プロジェクトの活動目的および目標

＜目的＞

教職員や学生の応急手当に関する意識向上と、知識の確認やスキル維持に寄与することとした。

＜目標＞

以下 1）～2）を目標として活動を行った。

1）　日本蘇生協議会（JRC）が示す「JRC 蘇生ガイドライン 2020」に基づき、教職員または学生を対象として普通救命講習Ｉを開催する。普通救命講習Ｉにおいては、開催までの支援及び修了証発行手続き等が必要なため、四日市市消防本部の協力を得る。その為の会議または手続き等を四日市市消防本部または本学を管轄する消防署で行う。

2）　その他、地域団体(学校・自治会・個人等)より依頼を受けた場合、講習を主催または指導者の一員として参加する。

２　活動計画（P）

教職員と学生を対象として、12 月に普通救命講習Ｉを計画した。本学を管轄する消防署の協力のもと、成人・小児・乳児の心肺蘇生法と AED 操作方法および、異物除去法が習得できる機会とした。講習では消防署の会議室が使用できるよう調整し、講習後に救急車やその他の消防車両、消防庁舎内、ヘリポートの見学ができるように計画した。

3　活動の実際と結果（D）

令和6年12月14日(土)の普通救命講習Ⅰ開催に向けて、受講希望者の募集を行った。周知方法は、本館1階やB館ホール、各研究室入り口などにポスターを掲示、および機会を通じて口頭での勧誘を行った。その結果、学生12名から受講希望申込があったが、体調不良等で当日欠席者が4名となった。講師担当の救急救命士の協力のもと、成人・小児・乳児の心肺蘇生法とAED操作方法の講習を行った。受講者全員に四日市市消防長発行の普通救命講習修了証が発行された。講習の際は、基本的な感染予防対策の徹底と消防署が定める基準を遵守し、参加者および受講者全員がマスクを着用した。また、会議室の出入り口と窓の解放、換気扇を常時運転し室内換気に留意した。

目標3)については、依頼がなかった。

4　活動の評価（C）

募集定員21名に対し12名と応募が少なかった。講習後のアンケートでは募集時期は丁度良いと全員が回答していることから、募集方法の工夫が必要と考える。講習内容としては、「受講を友だちに勧めたいと思いましたか？」の問いに回答者全員が「とてもそうおもう」と回答した。その理由として「医療従事者になる上で、いざとなった時に人命救出が実践できる」、「知ってる人が多いと救命率が上がるため」、「AEDを使うことに自信が持てる」などの記載があった。以上のことから、講習は充実した内容となっておりプロジェクト活動の目的は達成したと評価できる。

5　今後に向けての活動方針（A）

救急事案発生時にバイスタンダーとして活動できるためには、継続的な知識の確認とスキルの維持が重要である。そのために今後も活動を継続し、教職員や学生の応急手当に関する意識向上とスキル維持に寄与していく。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：四日市看護医療大学スピリットの継承

責任者名： 榎本喜彦

メンバー名：榎本 喜彦、千原 猛、森本 誠、伊藤 健太、渡辺 正生、高崎 昭彦

１　プロジェクトの活動目的および目標

四日市看護医療大学の卒業生が、社会人となり感じたこと、学生時代の経験などを後輩に伝える機会を設定する。そして、その交流を通し四日市看護医療大学学生としての心構えを次世代に伝えていくことを目的とする。また、卒業生と在校生で臨床検査技師になるための学修法、心構えについての討議、議論をし、目的・目標を見つけるためのアドバイス、それらを維持するための原動力とやる気を掻き立てる機会を提供することも目的としている。

２　活動計画（P）

・年２回（夏休み、春休み）卒業生を招いて大学で交流会を開催する。

（1回の講演に2～3人の講演者。１人、１時間程度を予定。講演者は、臨床検査技師）

・実際に働く事の難しさ、大学で学んだ勉強の意義などについて講演

・講演ポスターの作成

・講演後の意見交換会の開催

３　活動の実際と結果（D）

今回は１回の開催（11/16）であった。４年生も参加できるように開催時期も早くしなければいけないことがわかった。

開催においては、今年度就職した１回生（２名）を講師として招き、現在の職場での状況、学生時代を振り返ってのアドバイスなどの講演がおこなわれた。出席者は、１年生、２年生、３年生の在学生が中心であった。講演後の意見交換では、在校生側から多数の質

問が出され予定終了時間を延長する結果となった。

4　活動の評価（C）

在学生は、就職してからのことがよくわかっていないため不安に思ってる。教員ではなく、実際にこの大学を卒業した先輩の意見を聞くことができたため、今後の自分自身の目標ができたのではないかと思う。また、国家試験に対する向き合い方についても実際に経験した卒業生から聞き、今まで以上に勉学に身を入れなければならないことを認識していた。本講演後は、の講義などでわからないことがあれば、積極的に聞きに来るという良い兆候が見られた。

5　今後に向けての活動方針（A）

臨床検査学科は、卒業生がまだ少なく、卒業後の活動に不安がある。この活動を継続することにより、四日市看護医療大学の学生の心得、強いては卒業生としての使命を育てていけるのではないかとかと考える。その為、今後も活動を継続していこうと考えている。来年度は、臨地実習に行く前、国家試験の特別講義が始まる前の２回を計画する予定である。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：地域住民の健康増進に寄与する
責任者名： 榎本喜彦
メンバー名：榎本 喜彦、千原 猛、森 啓至、森本 誠、大島 茂、加藤 泰宏、金田 泰代、伊藤 健太、後藤 由紀、大谷 喜美江、佐藤 優子、小寺 直美、吉川 尚美、山口 鎮、渡辺 正生、水谷 有、高崎 昭彦
１　プロジェクトの活動目的および目標 生活習慣病やがんの早期発見のため定期的な健診を受けることは大変重要である。 四日市市民への健康増進に貢献するための定期的な検査（健康診断）とその後の生活改善の必要性、および一次救命処置（BLS：Basic Life Support）手技を広く市民に周知することは地域の健康づくりにおいて重要である。またその業務を担う臨床検査技師・看護師・保健師の役割、連携を広く知っていただく活動である。看護師、臨床検査技師の医療専門職の啓蒙活動を行うとともに、養成校である四日市看護医療大学のアピールをおこなっていく。 看護学科、臨床検査学科学生（有志）を健康展に参加させ接遇を含め臨床検査技師の重要性を体験し医療従事者としての志を高くする。 ２　活動計画（P） 年２回、大型ショッピングモールで健康についての啓もう活動をおこなう。 6月８日（土曜日）、近鉄百貨店四日市店（近鉄アートホール） 10月19日（土曜日）、アピタ四日市店（トナリエ四日市：わくわくふれあい広場） ３　活動の実際と結果（D） 看護学科、臨床検査学科両学科のボランティア学生とプロジェクトスタッフにより一次救命処置、健康チェック観察・体験を実施した。去年、日曜日に開催したところ参加者

の減少が見られたため、今年度は土曜日に開催した。その結果、去年を上回る参加人数であった。今年度は、2つの異なる場所で健康展を実施した。近鉄百貨店は会場までの動線が悪く参加者が少なかった。会場の違いにより参加者の増減が出ることが確認できたため、来年度は、アピタ四日市店（トナリエ四日市）で2回開催するようにしたい。看護学科と臨床検査学科の両学科合同開催であり、学生および教員における両学科活動の場として活用できた。

4　活動の評価（C）

企画の段階から学生主体で本イベントに取り組み、講義や実習では体験できない学びを得ることができた。また、参加者から『次はいつ開催するか』、『どこの大学ですか』等聞かれ、本イベントに対する興味が高いこと、大学の認知度を上げることができたと思われる。

5　今後に向けての活動方針（A）

地域住民の本イベントに対する興味が高いことが分かったため、継続的に開催していきたい。前回の開催と比較し、会場設営や来場者への検査説明はスムーズになっていた。開催会場の違いにより参加人数が大きく変わることが確認された。その為、来場しやすく、かつ市民の認知も上がってきたアピタ四日市店（トナリエ四日市）を中心に活動していこうと思う。

初めての看護と臨床検査両学科での合同開催であった。学生同士だけでなく教員も共同で活動しているため、両学科交流の場として大いに期待ができる活動であると考える。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：エイズ予防啓発活動－感染検査普及を目指して
責任者名：榎本 喜彦
メンバー名：榎本 喜彦、千原 猛、後藤 由紀、大谷 喜美江、佐藤 優子、渡辺 正生、高崎 昭彦
1　プロジェクトの活動目的および目標 エイズについての正しい知識の啓発の推進とその相談・検査体制の充実を多くの方に知っていただく紹介と啓発活動である。 感染の早期把握、治療の早期開始・継続によりエイズの発症を防ぐことができる。その活動に看護学科、臨床検査学科、両学科の学生希望者を参加させることにより、エイズについて、さらにその検査、治療、支援などの正しい知識を身につけさせる機会とする。また、感染検査ポスター等の作成により予防医学の一端を学修させる。さらに、街頭キャンペーンにより四日市看護医療大学のアピールを行っていく。 2　活動計画（P） ・四日市保健所保健予防課とともに啓発グッズの検討（9月から2週間に1度の割合で計5回のミーティングをおこなう） ・世界エイズデー（12月1日）に近い日程での予防街頭キャンペーン（予防啓発グッツの配布）（四日市駅周辺にて） ・感染検査普及ポスターおよびHIV検査カードの作成 3　活動の実際と結果（D） 看護学科学生、臨床検査学科学生、プロジェクトスタッフおよび四日市市保健所職員で12月1日に予防街頭キャンペーンをおこなった。この日のために用意した配布資料を配った。予防啓発グッズの配布物はなかなか受け取っていただけず気分が萎えてしまう。し

かし、寒い中一人一人が通行人に積極的に声をかけ予防啓発グッズの配布を行った。その結果、予定時間を上回る早い時間ですべての配布物を配布することができた。

4　活動の評価（C）

企画の段階から学生主体で本イベントに取り組み、啓蒙ポスターや配布物の作成を行った。昨年から継続して参加してくれている学生もおり、問題点や改善点などを話し合い、より良い予防街頭キャンペーンになることを目指して頑張っていた。

今回の活動を通して、学生たちはエイズへの理解と行政側の取り組みが理解できと感じた。今後もこの活動を継続し、四日市市民の意識改革を行っていけるのではないかと思っている。

5　今後に向けての活動方針（A）

地域住民はまだまだエイズに関する理解が低く感じる。その為。本プロジェクトを継続的に開催し理解度を上げていく。また、前回の開催と比較し、改善点など話し合い、より良い予防街頭キャンペーンを行えるようにする。

スケジュール的に厳しいのだが、今回同様、複数回のミーティングを行っていく必要がある。本プロジェクトは、看護・臨床検査の両学科の学生が参加してくれている。この活動を通して両学科の学生の交流が活発になるよう取り組んでいく。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：大学で“つながる”プロジェクト

責任者名：　岡村 勇飛

メンバー名：伊藤 康広、小菅 優子、多次 淳一郎、日比 千恵、榎本 喜彦、小寺 直美、鈴木 真紀子、春名 誠美、北井 真紀子、渡辺 正生、岡村 勇飛

１　プロジェクトの活動目的および目標（＝評価項目）

健康寿命の延伸が課題となっているなか、日々のヘルスプロモーション活動を通して、健康づくりを習慣化していくことが重要である。手軽に誰もが取り組みやすいウォーキングは健康づくりの観点からも容易に実施することが出来ると考える。ウォーキングを行うことで身体面だけでなく、ストレスの軽減など心理面への効果も期待できると考える。以上より、広大な敷地を有し、保健医療福祉人材を有する本学の特徴を生かし、大学を拠点とした健康づくり活動の場を創出し、八郷地区を中心とした四日市市民の健康増進に貢献することを目的とする。

２　活動計画（P）

大学構内・周辺にウォーキングコースを策定し、それを活用し地域住民を対象とした健康増進活動を行う。過年度と今年度の活動計画内容は以下の通りとする。

令和 3～5 年度	プロジェクト計画の精選・決定 複数のウォーキングコース（案）の作成 ウォーキングコースの散策と絞り込み（プロジェクトメンバー） ウォーキングコース最終案の検討（安全性の確保、距離測定など） 季節ごとのウォーキングコース周辺の撮影（プロジェクトメンバー）
令和 6 年度	本学の学生に活動内容の周知と協力依頼 協力の得られた学生とともにウォーキングコースの散策 学生とともにマップ作製案の検討

3　活動の実際と結果（D）

活動の目的や方向性を看護・臨床検査学科の学生に周知した。協力の得られた学生は看護学科1年生3名、2年生3名、臨床検査学科は1年生2名の計8名であった。学生とプロジェクトメンバーと一緒に対象者の体力や安全性などの観点から選定した複数のコースを散策した。ウォーキング活動は2回実施し、季節ごとでウォーキングが楽しめるよう、ルートの写真とともに周辺でみられる鳥[ハクセキレイ、ヒヨドリ（通年）、シジュウカラ（通年）、ホトトギス（初夏）、ハイタカ（晩秋）、ツグミ（冬）など]、や植物[ソメイヨシノ、山桜の一種、シロツメクサ、菫、スイカズラ、畑の玉ねぎの花、菜の花など]などの撮影も実施した。また、コースごとの距離を測定し、トイレ・シャワー・自動販売機など、実際に地域住民がウォーキングをする際に利用できる可能性のある設備の位置を確認した。また、対象者が健康増進のため有効的にウォーキングマップを活用できるよう検討した。

4　活動の評価（C）

プロジェクトメンバーと協力の得られた学生で複数のウォーキングコースを散策して、安全性の確保など検討する機会を設け、今後のコースマップの作製に向けた周囲の撮影を実施することができた。地域住民が健康づくりの場として活用できるよう、今後も学生と協働しマップ作製など周知に向けた検討が必要と考える。

5　今後に向けての活動方針（A）

引き続き学生のもつ力をどのように生かしてほしいかを明示したうえで周知・募集していく。過年度と今年度で得られた情報をもとにプロジェクトメンバーと協力の得られた学生とともにウォーキングマップの作製をすすめていく。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：心を豊かにする臨看シネマ

責任者名：　古田知香

メンバー名：古田知香、北井真紀子、永住沙樹、岡村勇飛、藤井夕香

１　プロジェクトの活動目的および目標

１）目的：本大学の学生において、ドキュメンタリー番組や映画の視聴を通して医療職・対人援助職として、人間の多様性や生命に関わることへの興味・関心を深めること。

２）目標：

① 医療系のドキュメンタリー番組や映画の視聴の機会を提供により、学生の人の多様性や生命を理解する興味や関心を引き出すことができる。

② 医療系のドキュメンタリー番組や映画の視聴の機会を通して、学生の興味や関心、価値観を教育活動に活用することができる。

２　活動計画（P）

- 前学期・大学祭において、上映会を計画した。

３　活動の実際と結果（D）

- 上映候補番組・映画を視聴して様々な分野の上映内容となるよう選定した。前学期において、各学科・学年の空コマに開催予定を計画し、興味のありそうな学生に個別に声かけ・連絡し、その学生からの友人勧誘も促した。結果、上映会４回を計画し、実施した。※場所：本館演習室１

日時	上映内容	参加者	
2024年6月19日4限	・「ひとりでも産みます」 ・親の世話になりたくない ・ﾄﾞｷｭﾒﾝﾄ72時間 大病院の屋上庭園で ・「ベイリーとゆいちゃん」小児病棟のセラピー犬 ・小さな願いが届くまで ・100カメ　赤ちゃん誕生１・２ ・ﾄﾞｷｭﾒﾝﾄ 72 時間「訪問看護師街を行く」	臨検１年	４人
2023年6月20日4限		看護１年	４人
2023年6月25日4限		看護２年	０人
2023年6月27日2限		看護２年	３人

- 学祭上映会

開催日時：2024年10月26日（土）10：00～15：00

学祭参加者に“ふらっと立ち寄ってもらう”を趣旨に、B館りんかんホールで上映した。

上映内容	参加人数
・ドキュメント７２時間 「マンモス団地を歩いてみれば」 「冬の終わりに　移動スーパー集落を行く」 ・ようこそ認知症の世界へ	地域の方・学生 約20名

4　活動の評価（C）

前学期上映会では、各学科・学年の空コマに合わせた開催と、興味のありそうな学生への個別勧誘と学生からの友人への勧誘（雪だるま方式）により、少人数ながら関心の高い学生の参加に繋がり、参加者は少数ながらも関心や満足度は高く、活動の意義はあったと考える。また、ドキュメンタリーや身近な年齢の話題は学生にとって新鮮であり、教育活動において映像媒体併用の有用性を実感することができた。

大学祭上映会では、立ち寄りやすく休憩スペースとして使用できる開催場所であったため、“ふらっと立ち寄ってもらう”という主旨を実現でき、自由な雰囲気の中で自然に上映内容に触れる機会となったと考える。

5　今後に向けての活動方針（A）

医療系のドキュメンタリー番組・映画の視聴機会を提供することで、人間の多様性や生命に関わることへの興味・関心を引き出す可能性が感じられた。しかし、ターゲットにしたい学生（あまり関心がない学生層）に届けるための工夫や仕掛けがもっと必要であると考える。そのために、再度、プロジェクトとしての取り組みを見直す必要があるため、次年度の活動はいったん保留として再検討する。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：高齢者施設における交流プロジェクト
責任者名：　古田知香
メンバー名：古田知香、三好陽子、藤井夕香、岡村勇飛
１　プロジェクトの活動目的および目標 １）目的：高齢者施設（介護老人保健施設）において、高齢者施設での看護・介護の質の向上の一助となるように、教員・学生と施設職員とが協力して高齢者・家族に関わることで、お互いの交流を深めることができる。 ２）目標： ①高齢者施設が要望する行事に教員・学生が参加し、施設職員と協力して活動を行うことで、施設職員だけでなく、高齢者・家族との交流を深めることができる。 ②教員・学生が施設職員と協力して活動を行うことで、高齢者への理解や知識・技術の向上に寄与することができる。 ２　活動計画（P） 施設側が要望する季節行事に教員・学生が参加し、施設職員とともに高齢者に対し、１施設において交流活動（高齢者の誘導、活動の介助）を計画した。 ・介護老人保健施設ことぶきでの創作活動（夏の金魚鉢うちわ作り） ３　活動の実際と結果（D） 新型コロナウイルス感染症の５類感染症への移行後も、感染リスクの高い高齢者施設では感染対策が継続しているため、学生の参加は控え、教員４名で活動を実施した。介護老人保健施設ことぶきでの創作活動（夏の金魚鉢うちわ作り）では、企画の段階から看護師長と教員で検討した。交流当日は感染対策を講じたうえで実施し、２フロア計 20 名の入所者が参加した。教員だけでなく看護・介護職員も協力して実施し、高齢者は積極的に参加し終始笑顔であった。実施後、施設職員に満足度のアンケートを実施した。 ４　活動の評価（C） 季節行事（創作活動）について、事前に教員・施設職員と綿密な打ち合わせを行

った結果、当日は問題なく実施でき、高齢者の満足度も高く、施設職員の満足度も非常に高い結果を得た。

5　今後に向けての活動方針（A）

来年度以降も、感染症の状況を確認しながら高齢者施設と相談し、季節行事への参加・支援活動だけでなく、職員教育目的の講義や勉強会の開催など、可能な範囲で活動を継続し、施設職員と大学教員が協力してお互いの啓発に努め、地域社会に貢献したいと考える。

令和６年度　プロジェクト報告書

地域研究機構　看護医療交流センター長様

下記の通り、報告いたします。

プロジェクト名：災害教育プロジェクト
責任者名：　小寺直美
メンバー名：小寺直美、工藤安史、久留島実姫、小菅優子、多次淳一郎、鈴木真紀子、野内香純、春名誠美、吉川尚美
１　プロジェクトの活動目的および目標 教職員や学生、地域住民の防災意識を高め、災害時に備える力を養うことを目的とした。特に、南海トラフ巨大地震の発生が予測される中で、個々の防災意識を高めることが重要である。 ２　活動計画（P） １）避難訓練後のイベント開催やポスター・チラシの作成 ２）学祭や近隣地区の防災訓練等の一般市民の集まるイベントでの防災ブース設置 ３）学生が災害時対応（ボランティア活動含む）を学ぶ研修会等の企画・開催 ４）災害医療サークルの学生が主催する学習会のサポート ３　活動の実際と結果（D） １）今年度は実施することができなかった。 ２）10月26日に開催された学祭では、防災に関するポスターの掲示、チラシの作成と配布を行った。また、能登半島地震被災地ボランティア活動のポスターも作成し掲示を行った。その結果、来場者からは「いつ起きるかわからないから準備をしないといけない」などの言葉があり、災害が身近にあることへの気づきとなり防災意識の向上につながったのではないかと考える。 ３）能登半島地震災害被災地へのボランティア活動を災害医療サークルの学生と共に行った。学生の参加は8回で、看護学生36名、検査学科3名だった。出発前にはボランティアの心構えや注意点などについてオリエンテーションを行った。活動内容は、足浴や茶話会の開催、現地で開催するイベントのサポートも行った。

認定NPOジャパンハートとのコラボ活動も行った。

学生からは「被災地では精神的な面でのケアとして寄り添う姿勢が求められると思った」「ありがとうと感謝の言葉をいただくたびに、自分が誰かの支えになっていることを実感し大きなやりがいを覚えた」等、学生の成長にもつながったとのではないかと考える。

4）学祭で掲示するポスターや配布用のチラシの作成をサポートした。

4　活動の評価（C）

今年度は、教職員向けの防災意識向上に向けた活動を行うことができなかったため、次年度の計画に反映させる必要がある。学生での防災活動やボランティア活動の効果は、来場者や参加者の反応から評価を行った。防災意識の向上につながったと想定される発言が多く聞かれた。

5　今後に向けての活動方針（A）

次年度は、早めに計画を立て、避難訓練後のイベントを実施できるよう準備を進める。また、学祭での防災活動については、ポスターやチラシの内容をさらに充実させ、来場者の関心を引く工夫を行う。ボランティア活動については、参加者のフィードバックをもとに、オリエンテーションの内容や現地での活動を改善し、より効果的な支援が行えるようにしていく。